水、電気の復旧に奔走

（由井りょう子ほか・著、石巻赤十字病院の100日間、東京、小学館、2011、p.66-74）

2012 年 10 月 12 日、災害医学抄読会 http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/

【要約】

地震発生の翌日、あるいは当日から、石巻市全体の機能が落ち、水・電気・ガスはもちろん復旧を待つ状態、そこに加え消費量の多い物資の不足も深刻なものであり、石巻赤十字病院を取り巻く環境は厳しすぎるほどであった。病院職員はそんな状況の中様々な苦悩を抱えていた。

水は通常、上水と普通の水道水の 2 系統があり、上水は半日分、水道水は 3 日分の備蓄があった。消防用水槽に貯留された水は万が一の火災発生時に存在しないと困るので利用できない。通常透析に用いる上水が半日分で、仮に純度は落ちるが水道水を透析にまわしたとしても何時間もつか、といったレベルの話であった。その他にも病院では手洗いが欠かせないため、節約のために医療用手袋を二重にするなどしていた。電気は二台の自家発電装置でなんとか持ちこたえていたが、発電装置の重油が無くなってしまえば使えなくない。病院食の調理や医療器具の滅菌処理の熱源として欠かせないガスは止まってしまっている。理念工場の被災でシーツや白衣などの替えがなく、さらにはペーパータオル、医療用エプロンもない事態であった。通信機能も断たれたため物資の手配も満足に出来なかった。

こうした状況の中、ギリギリのところで危機を回避することが出来た。まず被災翌日正午には水道局タンク車、民間給水車がやってきてくれて、以降水道局と病院を往復し給水し続けてくれた。また被災 3 日後には手配した覚えのない、新潟からの重油タンクローリーが到着したおかげで、停電を回避することが出来た。ガスに関して救いの手が差し伸べられたのは被災だった。液化天然ガスを病院横に仮設ガス製造装置を設置し、そこで気化させる方法をとることで、ガス補充の問題を解決させた。

一方で、エレベーターは専門業者による点検後の再運転が規則だったが、冠水のため業者が来院できず、エレベーターによる患者の運搬や食事の配膳も、すべて人手でするしかなく、エレベーターの回復までの間、職員は疲労困憊であった。物資の運搬、院内での患者の搬送、テント設営など力仕事が多い中、ボランティアの人たちの力が大きな助けとなった。また第一陣のボランティアの人たちが、新たに参加してくれたボランティアの人たちを育てることで、より大きな力となった。

一つ一つの問題が解決し、職員の間で喜びが湧き上がるたびに、また一つ苦悩が増えていく。まずはゴミの問題であった。医療ゴミの中には感染性のものがあるため、病院の表に出しておくわけにはいかない。そのため病院地下の駐車場にどんどん溜まっていく。また物資を運ぶトラックは道路の空いている夜中に走行してくるが、それは病院職員が夜中に物資の荷卸しをすることと同じことであり、職員の負担となっていた。解決する問題が多すぎて職員の休まる時間は訪れる気配すらなかった。